

国立国語研究所学術情報リポジトリ

引用の助詞「と」の用法を再整理する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): quotation, “to” (quotative particle), content presentation, object language, meta language 作成者: 山崎, 誠, YAMAZAKI, Makoto メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001132

引用の助詞「と」の用法を再整理する

山 崎 誠

YAMAZAKI Makoto: The Usage of the Quotative Particle "to" in Non-quotative Contexts in Japanese

要旨：

1. 引用の助詞とされる「と」には、発話・思考の内容をあらわすもののほかに、物事の客観的なありさまをあらわすものがある。この用法は、発話・思考をあらわすものと連続しているものと考えられる。この二つの用法は、相違点もあるが、その基本的な機能は同じであって、“情報を、その内容を示すことで客観的に提示し、その内容について語る表現へ結び付ける”ものであるといえる。提示部とそれを受ける述部との関係は、ちょうど対象言語とメタ言語との関係になぞらえることができる。
2. 提示部における情報内容は、物事をそのまま示したものという客観的な性格をもつが、それについて語る述部との意味的な関係をそこなわないかぎりにおいて、適当に内容を変更することができる。

キーワード：引用 「と」 内容提示 対象言語 メタ言語

Abstract: The Japanese quotative particle "to" can be used to express an objective state of affairs as well as to quote utterances and ideas. In fact, these two usages are related to one another, their basic function being "to present information content objectively and to link it to the predicate which comments on the content phrase (or clause)". The relation between the content phrase (or clause) before "to" and the predicate is parallel to that of language and meta language. The content phrase (or clause) gives an objective description of the referent, and it may be paraphrased provided this does not violate the semantical restrictions of the predicate.

Key words: quotation, "to" (quotative particle), content presentation, object language, meta language

0. はじめに

最近、日本語の引用表現についての研究が目立つようになってきた。藤田（1986, 1988）、砂川（1987, 1988a, 1988b）の一連の研究や、「日本語学」7卷9号の特集などにそれがよくあらわれている。

ところで、引用表現で注目される述語は、「言う、思う」などの引用動詞に代表されるものがほとんどであって、本稿で扱うような、そこからはずれたものは、取り上げられていない（注1）。このことは、「引用」という用語の定義から来る当然の帰結なのかもしれないが、「引用」という用語にとらわれるのではなく、引用の助詞とされる「と」の用法的な広がりをみてみると、引用動詞以外の述語をとることもあり、そこに引用表現との連続性や類似性が認められる。

本稿では、この引用表現からはずれた用法をみるとことによって、引用の助詞「と」の用法を再整理してみる。

1. 引用文における引用部と述部との関係

1.1. 典型的な引用文

まず、通常、引用文とされるものについて、引用部とそれを受けた述部との意味的関係をみてみよう（注2）。引用とは、基本的には発話や思考の内容を示すことである。次の(1)～(2)は、その典型的なタイプである。

- (1) 太郎は「僕は学生です。」と言った。
- (2) 花子はその男が犯人ではないかと思った。

これを、述部と引用部の意味的関係という観点でみると、引用部が述部で表されている発話・思考行為の内容になっていることが分かる。すなわち、述部で述べられている発話・思考行為の表現内容的な部分が引用部に、発話・思考行為自体を表す部分が述部になっている。つまり、あるひとつの発話・思考行為について、その言語的事実という面を引用部で取り出して見せていると言える。このことは、引用部が表している行為を、述部が表している行為と事実上同じものと考えることができるということである。

また、発話・思考行為以外にも、それに関連した次のようなものも述部になりうる。

- (3) 「本日発売」と書いてある。
- (4) 昨夜、地震があったと聞いた。
- (5) 西武はロッテの6安打を上回る11安打を放ちながら完敗。森監督は「ムダ打ちだ」と不満タラタラだ。(「サンケイスポーツ」92年9月14日) (注3)

(3)は、表記を表す行為で、これは表現媒体が文字であるというだけで、発話と同じカテゴリーとみなしていいだろう。(4)は、言語を用いた表現行為ではなくて、表現を受け取る行為であるが、言語表現を内容とする行為という点では、発話・思考行為の側に含めてよいだろう。(5)は、述部が行為を明示的に表すものではなく、行為主体の状態とでもいうものを表しているが、「と」で取り出された部分が、述部に対してその言語表現内容を表しているという点では、他のものと同じである。

以上をまとめると、典型的な引用文とは、次のような文である。

- (a) 言語表現を内容とする一つの事態について、引用部でその言語事実的侧面(=内容)示し、述部でその事態を表す文。

また、典型的な引用文のごく近いところに位置するものとして次の(6)(7)のような例がある。

- (6) 太郎は「これ、あげる」とプレゼントを渡した。
- (7) 花子は早く家に帰ろうと近道をした。

これらは、引用部が言語表現の内容を表しているという点では典型的な引用文の場合と同じであるが、述部が引用部を内容とする行為・状態を表してはいない。述部の表している事態は、引用部の表している事態と同一の事態ではなく、共存する別の事態である。引用部は、ここでは、述部の内容としてではなく、一種の付帯状況となっている。このタイプの引用文は、次のようにまとめられる。

- (b) 引用部で言語表現を内容とする一つの事態の内容を示し、述部で言語表現を内容としない別の事態を表す文。

引用部が述部の内容となっているか、付帯状況となっているかは、場合に

よっては区別しにくいものもある。つまり、述部の表す行為・状態が言語表現をその内容として必要とする度合によってちがってくる。例えば、次の(8)(9)の述部は、引用部を内容とするようでもあるし、付帯状況とするようでもある。

- (8) 一ヶ月たったとき、代理店から封書がとどきましたので、やっと修理ができるのだと喜び、中を開くと、大体次のような文面でした。(木村治美「黄昏のロンドンから」)
- (9) 残り1分に同点トライを奪い、その後の逆転ゴールを決めたバターソンは、「グッドゲーム」と大興奮。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)

1.2. 言語表現を内容とする述部

例えば、「俳句を詠む」と「俳句を作る」の2つを比べてみると、

- (10) 芭蕉は、「古池やかわづ飛び込む水の音」と俳句を詠んだ。
- (11) ?芭蕉は、「古池やかわづ飛び込む水の音」と俳句を作った。

(11)の方がやや不自然な感じがする。2つとも言語に関する行為であるが、「俳句を作る」の方が、「俳句を詠む」に比べて表現性とでもいうものが少なく、言語表現を内容として必要とする度合が小さいということが、不自然に感じられる原因と考えられる。

また、言語表現ではないが、それに近い表現性を持つものがある。

(12) トン、トン、トン、トンと合図をした。
(13) ピアノでドレミファソと弾いた。

(12)は、述部の「合図をする」が引用部の言語的表現性をある程度保証していると考えられる。同じように音を表していても、

- (14) ドスンと足を踏み鳴らした。

のようになると、言語表現ではないので引用文とは考えない。(12)(13)は、厳密には言語表現を内容とする事態ではないが、広い意味での表現行為であり、「と」で取り出された部分が、述部の内容になっていると考えられるので、本稿では、周辺的な引用文とみなした。次の(15)(16)や、注1の例は、このタイプの非言語的表現行為の例と考えられる。(なお、用例中の下線部は引用部、波線は述部を表す。)

- (15) [電話機のプッシュボタンで] BOX 番号 767670#と押した後あなたのFAX番号と#をプッシュしてください。(「週刊朝日」92年7月17日)
- (16) パネルからの排紙操作は面倒だ。[ストップ]、[シフト]+[排出]と押し、排紙が完了するのを待って[印刷可]を押さなければならないのだ。(「月刊PC」92年11月)

1.3. 内容と対象

(15)(16)のような例は、提示部が述部の内容でもあり、また、述部の動作の対象でもあるような例である。通常は、述部の内容と対象とは別のレベルの概念であり、混同することはない。たとえば、

- (17) はがきに国語研究所の住所を書いた。
- (18) はがきに「東京都北区西が丘3-9-14」と書いた。

のように、(17)が述部の動作の対象を表し、(18)はその述部の内容（厳密に言えば、述部の動作の対象の内容）を表している。同一の事柄であれば、対象が内容を指示するという関係が認められる。すなわち、(17)の「国語研究所の住所」は、(18)の「東京都北区西が丘3-9-14」を指している。その意味で(17)と(18)とは認知的意味が同じである。対象を表すことばは、内容を表すことばとは異なるのが、普通であるから、

- (19) はがきに「国語研究所の住所」と書いた。

は、(17)とは全く別の意味である。だが、次の例のように、内容と対象とが同じことばで表されるものもある。

- (20) 次に□を入力します。(シーイーシー発行「Q&A ユーザーズマニュアル」)
- (21) □と入力して□を押すと【以下略】(シーイーシー発行「Q&A ユーザーズマニュアル」)

この場合も、(20)が述部の動作の対象を表し、(21)が述部の内容を表すということには変わりはないが、認知的な意味は同じであり、事態としては同じことを表している。押されるキー（=述部の動作の対象）を表すことばと、のキーによって入力される文字（=述部の内容）とが同じことばで表されているからである。

次の例もそうだが、言語を対象とする動作には、対象と内容が同一の表現

で表すことができるものがある。

- ② 例えば雨とひくと→38の「～雨」に出会い→さらに参照先を辿ると→合わせて160の「雨」で終わる言葉を発見できます。(日外アソシエーツ発行「逆引き熟語林」広告リーフレット)

1.4. 引用文の類型

上のような考察の結果、本稿で言う引用文、すなわち、主として言語表現内容を表す引用部とそれを受ける述部とを持つ文を、おおまかに次のように分類する。

表1 引用文の類型

分類	引用部の表すもの	述部の表すもの	例 文
A1	言語表現の内容	言語表現を内容とする事態	(1)～(5)(8)(9)(10)
A2	言語表現の内容	言語表現を内容としない事態	(6)(7)(8)(9)
A3	言語以外の表現の内容	言語以外の表現を内容とする事態	(12)(13)(15)(16)

引用部が、言語表現の内容を表しているという点では、A1とA2は同じグループになる。述部が表現内容を取る事態を表しているという点では、A1とA3とが同じグループになる。これまでの引用表現の研究は、典型的で圧倒的に用例の多い、A1に関するものが多い。A2については、「と」の後に、「言う、思う」などの省略が想定されるとする意見がある。また、A2のタイプの引用部と述部との関係を論じたものに藤田（1986）がある。A3のタイプは、用例が少ないためかほとんど言及されていない。

1.5. 引用部と述部との意味的関係

1.5.1. 引用部の客觀性

引用文の典型である、A1のタイプについて、その引用部と述部の意味的な関係をみてみよう。

引用部は、ある事態の発話・思考事実を提示するものなので、表し方の幅がそれほど広くないのに対して、述部は事態そのものを表すので、その事態がどういう意味合いを持つかによってさまざまな表し方ができる。例えば、

「すてきな洋服ですね」と言った場合、

- Ⓐ 「すてきな洋服ですね。」とほめた。
- Ⓑ 「すてきな洋服ですね。」とお世辞を言った。
- Ⓒ 「すてきな洋服ですね。」と皮肉を言った。

のようにいろいろな述部が可能である。つまり、引用部では素材となる言語表現が示されるだけであるが、述部ではその引用部を内容とする事態全体がどういうことかを表す。この点で、引用部は述部と比べてより客観的であると言えよう。

1.5.2. 対象言語とメタ言語

引用部と述部との意味的な関係は、論理的意味論における対象言語とメタ言語との関係になぞらえることもできよう。

対象言語とは、普通に、物事を表すときに用いる言語であり、メタ言語とは、その対象言語について何事かを語る場合に用いる言語である。この区別は相対的なものであるので、メタ言語を対象言語とみなし、それについて何かを言うという、より高次のメタ言語を導入することもできる。それによって、現実世界を表す対象言語を1階、それに対するメタ言語を2階、そのまたメタ言語を3階というように、言語のレベルを階層的にとらえることができる（注4）。

対象言語とメタ言語の区別の例として、

- Ⓐ 東京は日本の首都である。
- Ⓑ 東京は固有名詞である。

を考えてみる。Ⓐは対象言語に属する文であり、Ⓑはメタ言語の文である。文中の“東京”が、Ⓐでは、日本の首都である都市を表しているのに対し、Ⓑでは、「東京」という語を表している。後者のように、語そのものを表す場合は、引用符などで囲ったり、字体を変えたりする場合が多い。

この対象言語とメタ言語との関係は、通常、名詞を使って、述べられる場合が多いが、文の場合でも事情は同じである。

- Ⓐ 雪は白い。
- Ⓑ 「雪は白い。」は日本語の文である。

(28)の“雪は白い。”は、対象言語の文であり、雪が白いということを表しているが、(29)の“雪は白い。”メタ言語に属し、雪は白いという文を表している。

このように、メタ言語として、言語表現そのものを表す場合は、通常は、引用符で囲って示すが、それが唯一の方法ではない。なぜなら、(29)の代わりに

⑩ ⑧は日本語の文である。

と言ってもよいかからである。“(28)”が“雪は白い。”を指し示しているからである。このとき、“(28)”は、“雪は白い。”という文に対して恣意的に与えた記号である。言語表現自体が現実を写し取った記号であるとみれば、いわば、“(28)”という表現は、記号の記号（あるいは、記号の名前）と考えることができる。1階のレベルである対象言語、すなわち、日常言語は、社会慣習として固定しているが、それを表す2階のレベルのメタ言語は、ある程度自由に決めることができる（ただし、通常はメタ言語としても日常言語を用いるのが普通である）。

このように、メタ言語は、言語表現を対象としてそれについて語るという性質を持っている。この性質は、引用部で言語表現を内容として示し、述部でその事態を語るという引用表現にも近い関係を持っている。

1.6. 述部の範囲

本稿で述部とした部分は、形の上では、述語となる用言だけでなく、修飾語や補語を含めている場合がある。それは、引用部の指し示す事態について、述部でのべる場合、主観的な意味付けを与える部分も含めているからである。例えば、次の波線部などである。

- ⑩ 客の亜未（奥山）は、恋人にプレゼントされた洋服を着るために、1週間で10kgやせたいと無理なことをいう。（「TVガイド」92年10月23日）
- ⑪ 医者に、これまでのいきさつを話し、「今は痛いような気がするが、気のせいかもしぬない」と、あいまいな事を言った。（さくらももこ「もものかんづめ」）
- ⑫ 私は今まで二回ほど、親友にむかって、「あの男はどう見てもあなたには気がなさそうだから、あきらめた方がいい」と、冷静で適切なアドバイスを与えた

ことがあります。(柴門ふみ「恋愛論 2」)

- ⑥4 種市萌春は、結婚の相手を探す時、仲人口をきいてくれるという同郷の夫婦に「おとなしい、静かな娘ならい」と条件は一つしか出さなかった。(曾野綾子「お家がだんだん遠くなる」)

2. 引用表現の上位概念

2.1. 引用の助詞の非引用的用法

引用の助詞とされる「と」の用法をみてみると、1.3.で分類した類型におさまらないものがでてくる。例えば、次のような例である。

- ⑥5 價格もメンズのジャケットで約3~5万円とかなり手頃。(「POPEYE」92年6月26日)
- ⑥6 警視庁では都心の千代田、中央、港の三区を「第一方面」と呼ぶが、国会周辺を担当する麹町署や皇居周辺の丸の内署など有力署が居並ぶ第一方面の中で、万世橋署の署員数は二百十六人と、少ないほうだ。(「週刊朝日」92年7月17日)
- ⑥7 朝は豆腐のみそ汁、昼はがんもどきの煮物、晩はおでんの豆腐と、一日中豆腐づけでもあきない人がいるくらい、日本人にはなじみ深い食材だ。(「POPEYE」92年6月26日)
- ⑥8 スコットランドの旅行で、ネッシー出現の最古の記録が残るウルクハート古城に寄ったことは、まえにお話ししました。あのあたりは一、二軒の別荘があるだけで、まことに荒涼としてわびしく、ほかには何もありません。これが日本だったら、たちまち土産物店が軒を連ね、ネッシー饅頭、ネス湖洋羹、恐竜こけし、と並ぶことでしょう。(木村治美「黄昏のロンドンから」)
- ⑥9 巨人はその裏、中前打で出た篠塚を川相が送って一死二塁としたが、モスピーア原と倒れ先制機を逃した。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)
- ⑥10 子供の衣類はすべて化織。大人もののセーター類には純毛もあります。いいかえれば、庶民に買えるウールはここにしかありません。あとは一万円、二万円と払って、デパートや専門店で、極上品を買うことです。(木村治美「黄昏のロンドンから」)

これらは、言語表現の内容を示しているものではないので、いわゆる引用とみなすことはできない。しかし、「と」で取り出された部分と述部との関係をみてみると、後述するように述部の内容を示しているという点で、引用文の場合とほぼパラレルな関係が見いだされる。したがって、これらの例と

いわゆる引用文とを包括的に記述する体系を考えてみたい。

2.2. 本稿で用いる用語

そこで、「と」で示される連用修飾成分を持つ文を、その内容を提示するという働きから、本稿では総称として「内容提示文」と呼び、「と」で提示される部分を、「提示部」と呼ぶことにする。つまり、内容提示文、提示部は、それぞれ、引用文、引用部の上位概念となる。

さらに、いわゆる引用文、引用部と上にあげたような(35)～(40)を区別するために、内容提示文のうち、引用文でないものを「属性内容提示文」、提示部のうち、引用部でないものを「属性内容提示部」と呼ぶことにする。

このような見方をすると、引用文、引用部は、「言語表現内容提示文」「言語表現内容提示部」という言い方ができるだろう。

以上の用語を整理すると、次のようになる。

(c) 内容提示文 └ 言語表現内容提示文 (=引用文)

 └ 属性内容提示文

(d) 提 示 部 └ 言語表現内容提示部 (=引用部)

 └ 属性内容提示部

これらは、あくまで、本稿で一時的に与えた名称である。

3. 属性内容提示文について

3.1. 属性内容提示文の類型

引用文については、これまで研究がなされてきたが、本稿で言う属性内容提示文については、ほとんど言及がない。そこで、このタイプの文の特徴を記述するとともに、引用文との関係を考えてみたい。

上の(35)～(40)のような属性内容提示文を提示部の意味的、外形的特徴から、大まかに表2のように分類した。

以下、順を追って用例を挙げて説明する。なお、用例中の下線は提示部を、波線はそれに対する述部を表す。

表2 属性内容提示文の分類

分類	提示部のタイプ	分類	提示部のタイプ
B0	変化の結果	B2	ことがらの列挙
B1	尺度表現	B3	述部の要素の列挙

3.2. 変化の結果を提示するもの (B0)

3.2.1. 用例

- (41) 総売り上げは締めて五百二十三万円となり，かろうじてノルマは達成できました（真崎慎（他）「夜逃げ屋本舗」）
- (42) しかし、4番・石嶺は中飛、高橋智の四球で二死満塁としたあとも、柴原が二ゴロで無得点。（「サンケイスポーツ」92年9月14日）
- (43) 参加者を男性と限った。
- (44) [音川は]まだ桜井殺しの被疑者と決まったわけではなく、（森村誠一「虚構の空路」）
- (45) いま日本は国際的な要求もあって経済大国から生活大国へと方向転換しつつあるが、（「サンケイスポーツ」92年9月14日）

3.2.2. 解説

このタイプの特徴としては、

- ① 提示部が、述部の表す動きや作用の結果の内容を表している。すなわち、述部に対して、結果でもあり、内容でもある。
- ② 提示部を表す「と」あるいは「へと」を、「に」で置き換えても認知的意味は変わらない。

ことが挙げられる。これは、1.3. の「対象と内容」で挙げた(20)(21)（対象と内容とが同じことばで表される例）とパラレルな関係であることがわかる。つまり、提示部が述部に対して二重の関係に立っていること、提示部を表す助詞を他の助詞に変えられることが共通しているからである。

このB0のタイプの提示部は構文的には、必須補語と考えてもよいだろう。それに対して、B1以下のタイプは、副次補語的である。
(43)(44)の「限る、決まる」は、言語表現行為的でもあり、A1のタイプとしても考えられる。

3.3. 尺度表現を提示するもの (B1)

3.3.1. 用例

このタイプは、物事がある尺度で計ったときの尺度表現（主として数量表現）を「と」で提示し、それに対する、より主観的な意味付けを述部で行っているものである。例を以下に示す。

- (46) 幅は 45cmとコンパクトサイズ。キッチンに置きやすく場所を取らない大きさです。(「東芝電子レンジ総合カタログ」92年9月)
- (47) [PC-386NOTEARは] 重さも約3kgと重く、とても携帯には向かない。(「月刊PC」92年11月)
- (48) 平均株価は 224円安と反落、終値ベースでは5日ぶりの1万8000円割れとなつた。(「日刊スポーツ」92年6月5日)
- (49) [メキシコの] 若い労働者の時給は わずか四～五ドルと米国の約五分の一。(「JAF MATE」92年9月)
- (50) 年5.10% (半年複利)と定期預金より有利です。
(文部省共済組合ちらし「共済積立貯金」)
- (51) 容量も約5人分 (3.1ℓ) ととってもビッグ。
(「東芝電子レンジ総合カタログ」92年9月)
- (52) センターリストに登録できる電話番号の桁数も、CCT-98Ⅲの22桁に対して、まいとくは 32桁と長い。(「DOS Magazine」92年3月)
- (53) 1食あたり230キロカロリーと普通のラーメンの半分程度。
(「日刊スポーツ」92年3月28日)
- (54) 妊娠5ヶ月と身重ながら「適度の運動が必要ですから」と、コースのロープわきで観戦する夫人【以下略】(「日刊スポーツ」92年6月5日)
- (55) 第3ラウンドを行い、ブルース・リッキー(米国)がこの日73とスコアを崩したもので通算8アンダーの208で首位を守った。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)
- (56) あいにくの向かい風1.4mで、記録こそ 21秒29と平凡だったが、100mに続き学生2冠王に輝いた。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)
- (57) この大会を終わって岡本の賞金ランキングは 3位と変わらないが、トップとの差は約630万円に。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)
- (58) 巨人は二回、岡崎の右前打に四球、さらに相手ミスをからめ一死満塁と絶好のチャンス。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)
- (59) 7棒8番と絶好の枠順を得たカミノキリンジに期待したい。
(「日刊スポーツ」92年3月28日)

60 日本の家は、昔から、六畳、四畳半、と、どうして規模が小さいのでしょうか。
(木村治美「黄昏のロンドンから」)

3.3.2. 解説

① 提示部では、長さ・重さ・金額・割合・容量・順位・成績など、数量的に表せるものを提示するものが多いが、そうでなくとも可能なようである。

例えば、次のような例が考えられる。

- 61) サイズは LL と特大。
- 62) 宿泊は、帝国ホテルのインペリアルルームと超豪華。
- 63) 朝食は、サラダだけと低カロリー。
- 64) [マラソンで] ○○選手は、早くも折り返し点ととばしている。
- 65) 10回、無死満塁。日本ハムベンチは岸川を敬遠。あえて、首位打者に躍り出た助っ人ブーマーと、勝負に出た。(『日刊スポーツ』92年6月5日)

上のような例を見ると、必ずしも数字が含まれていなくてもよいことが分かる。しかし、(61)から分かるように、これらは、背景にあるスケールを持っていることが分かる。例えば、(62)で言えば、ホテルの部屋の豪華さの順位というスケールが考えられるし、(63)では、「サラダだけ」の部分にメニューを構成するスケールが、また、(65)では、打率からみた選手のランクなどのスケールがあると考えられる。

一般的にスケールを想定できないものは、B1 のタイプにはならない。例えば、

- 66) ×彼は雪国出身と色が白い。
- 67) ×あの人はアメリカ人と英語ができる。

のようには言えない。

② 提示部と述部との意味的関係

提示部は述部と比べると、相対的により客観的な情報を表しているという基本的な意味関係は、言語表現内容提示文（いわゆる引用文）の場合と同じであると考えられる（1.5.1. 参照）。

つまり、内容提示文では、提示部よりも述部の方がより客観的な表現であ

るということはない。だから、述部と提示部の表現を入れ替えた次のような言い方はできない。

68 ×平均株価は反落と 224 円。

69 ×若い労働者の時給は米国の約五分の一とわずか四～五ドル。

客観的、主観的という区別は相対的なものであるので、(69)では、述部の役割を果たしている「五分の一」という表現が、次の(70)では、提示部になることもできる。

70 若い労働者の時給は、米国の約五分の一と少ない。

③ 同一事態性

1. 1. の(a)で示したように、典型的な引用文は、一つの事態について、提示部でその言語事実的側面（=内容）を示し、述部でその事態を表すという関係があった。すなわち、提示部と述部とで表されている事態は、表現のレベルは異なるが、同一の事態についてのものである。これは、B1 のタイプにもあてはまることがある。

だから、

71 巨人が 10 連勝と、ファンはよろこんでいる。(A1)

72 巨人が 10 連勝と、絶好調である。(B1)

は、ともに、同一の事態を異なった観点から表したものといえよう。すなわち、(71)は、「巨人が 10 連勝」したという言語表現内容と「ファンはよろこんでいる」という言語表現行為とが、同一の事態を構成すると考えられる。(72)は、「巨人が 10 連勝」したことと、それが「絶好調である」こととが、やはり、あるひとつの事態を、客観的な内容提示という部分と、主観的な意味付けという部分とで構成していると考えられ、両者の間にパラレルな関係が存在する。

また、

73 ? このラーメンは、1 食あたり 230 キロカロリーと、味もなかなかだ。

は、若干奇異な感じを与える。これは、(73)は、提示部も述部も同一のモノについてかたってはいるが、同一の事態についてかたっているのではないから

であると考えられる。先の(6)(7)が非文になったのも、観点を異にする同一の事態という見方ができなかつたためでもあると考えられる。

④ 類義表現との関係

(53)を、

(74) 1食あたり 230 キロカロリーで、普通のラーメンの半分程度。

という言い方もできるが、この場合は、提示部—述部という関係はなくなり、ふたつのことがらを単に並べただけになる。すなわち、順序を逆にして、

(75) 普通のラーメンの半分程度で、1食あたり 230 キロカロリー。

のようにも言えるからである。

また、提示部は述部に対して、その理由をあらわしているようなふくみもあるが、結果としてそう見えるだけであつて、理由の表現とは考えがたい。提示部には、述部と比べると、相対的に客観的な数量が現れているので、そのように思えるにすぎない。純粋な理由を表す文、例えば、

(76) 頭が痛かったので、薬をたくさんのんだ。

の「ので」を「と」で置き替えてみると、

(77) ×頭が痛かったと薬をたくさんのんだ。(B のタイプとしては不可)

は、A2 の引用部が付帯状況を表す解釈となり、積極的に理由をあらわしている表現にはならない。

3.4. ことがらを列挙するもの (B2)

3.4.1. 用例

このタイプは、複数の事態や物事を「と」で提示し、その列挙されたもの全体がどういう意味を持っているかを述部で与えているものである。記述の都合上、(ア)(イ)の二つのサブタイプに分類した。例を以下に示す。

(ア) 提示部での列挙の順序に意味がないもの。

(78) まつたけ、くり、きのこと、秋の味覚が並ぶこの季節。(「きょうの料理」92年10月)

(79) しかし最近は、[カップめんは] うどん、そば、生タイプと種類も多様化していて、それぞれ待ち時間が違つたりする。(「SPA！」92年6月3日)

(80) 冷・暖房の際、冷気が室内の下にたまつたり、暖気が上方だけにとムダが多い

- いもの。(「快適生活大研究」92年7月)
- ⑧1 三菱パジェロが難所カラクム砂漠を制覇。1、2、3位と上位独占。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)
- ⑧2 フランスのお洒落な人々の間では小粋なデザインと豊富な色・柄、そしてリーズナブルな価格と三拍子揃ったブランドとして知られているこの「フィルアフィル」。(「POPEYE」92年6月26日)
- ⑧3 私は仕事中はずっとFMをかけっぱなしで、それも1局だけでなくある時間はA局、次の時間はB局と、ハシゴをするのです。(「FMfan」92年No.21)
- ⑧4 一方、ケンはホテルの部屋まちがいや、シーワールドでびしょぬれになったり、飛行機に乗りそこなったり……と、トラブルの連続。(「週刊朝日」92年7月17日)
- ⑧5 「告発の行方」「羊たちの沈黙」と20代で2個のオスカーを手にしたハリウッド史上稀に見る出世頭、ジョディ・フォスター。(「TVガイド」92年6月26日)

(イ) 提示部での列挙の順序に意味があるもの。

- ⑧6 投手陣の総動員だ。新浦、金沢、角盈、小坂とつないで、延長十回からは岡林を投入したのだ。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)
- ⑧7 読者アンケートの結果では、DiskX IIが圧倒的な強さをみせた。〔中略〕そして、Newton-98、WX II+、Norton Utilities、エコロジーIIと続いている。(「月刊PC」92年11月)
- ⑧8 最近『愛の贈り物』(青土社)『女の都』(作品社)と続きざまに著書が出た。(「POPEYE」92年6月24日)
- ⑧9 [荻野目洋子は]今年になって「STEAL YOUR LOVE」「コーヒー・ルンバ」とヒットを連発。(「日刊スポーツ」92年6月5日)
- ⑧10 安田記念、オーケスと、2週続けて万馬券を取り損い〔以下略〕(「SPA！」92年6月10日)
- ⑧11 十年後、二十年後、三十年後と、年を追うと共に死の灰の影響が現れてくる。(広瀬隆「ジョン・ウェインはなぜ死んだか」)
- ⑧12 2月24日、3月11日と、2度にわたって大腸がん手術を受けた俳優黒沢年男が27日、茨城・総和町の友愛記念病院を退院した。(「日刊スポーツ」92年3月28日)

3.4.2. 解説

① 複数性

このタイプは、述語で述べられている事態の例を列挙するものである。提

示部は、述部に対して、より具体的な情報を与えている。この点で、3.3.の尺度型と同様、典型的な引用文との間に類似関係が見られる。

このタイプの特徴は、述部にことがらが複数であることを示す語句があることである。複数性は、「多様化する、ムダが多い、三拍子揃う、2週続けて」など、明示的に示されることもあるが、「並ぶ、ハシゴをする、つなぐ、年を追う」のように、複数のことがらを前提にして成り立つ表現として表される場合もある。また、(ア)のタイプのように、提示部でのことがらの列挙の順序に意味がない単なる複数性の述部の場合と、(イ)のタイプのように、列挙の順序に意味がある、順序性を表す述部の場合とがある。

また、述部の複数性と整合的であるためには、提示部のことがらが、二つ以上なければならない。したがって、列挙的に提示されたもののうちの一つだけ取り出して「と」で述部へつなげることはできない。

例えば、(78)(89)を、

03 ×まつたけど、秋の味覚が並ぶこの季節。

04 ×〔荻野目洋子は〕今年になって「STEAL YOUR LOVE」とヒットを連発。

すると、述部の持っている複数性と適合しない。ただし、提示部に例示を示す語句がある場合は、不自然ではあるが、許容度はやや上がるようである。(80)を、

05 ?冷・暖房の際、冷気が室内の下にたまったりと、ムダが多いもの。

に変えると、何となく物足りないような表現になる。これが、

06 冷・暖房の際、冷気が室内の下にたまったりなどと、ムダが多いもの。

になれば、「など」が他を暗示するため、述部の複数性との不適合は起こらない。

また、述部に明示的に数量を示す語句があると、意味的な整合性がなくなり、不適格な文になる。例えば、

07 ×フランスのお洒落な人々の間では小粋なデザインと三拍子揃ったブランドとして知られている～。

08 ×安田記念と、2週続けて万馬券を取り損い～

② 順序性

(イ)のタイプのように、述部に順序性のあるものの場合は、列挙されたことがらの並び順に意味がある。並び順を変えると、文の表す事態が別のものになる。

❸では、この順序で投手交代が行われたことを表している。また、❻❽❾のような場合は、現実にこの順で著書やCDが出たのでなければ嘘になるであろう。(イ)のグループの例はそういう意味で時間・空間軸にそったことがらをそのままの順序で提示していると言えよう。

逆に、(ア)のタイプは、列挙されることがらが、どのような順序で述べられてもかまわないものである。一見、順序的である❶の「1, 2, 3位」は、慣習的にそう言ったまでで、「3, 2, 1位」となっていても、述部との整合性は保たれるだろう。❷❸のように、時間を追ったことがらを列挙する場合は、やや(イ)のタイプに近いものがある。

③ 類義表現としては、例示を表す「など」が挙げられる（注5）。❷～❹などは、「と」を「など」で置き換えることも可能である。しかし、❺❻❽は、「など」で置き換えると以下に挙げるようにならぬ。

- ❹ ?? フランスのお洒落な人々の間では小粋なデザインと豊富な色・柄、そしてリーズナブルな価格など三拍子揃ったブランドとして知られている～。
❺ ?? 「告発の行方」「羊たちの沈黙」など20代で2個のオスカーを手にしたハリウッド史上稀に見る出世頭、ジョディ・フォスター。
❻ ?? 2月24日、3月11日など、2度にわたって大腸がん手術を受けた俳優黒沢年男～。

これらが、不自然に感じるのは、「など」の持つ例示性が、「と」の例示性と違って、プラスアルファを暗示するからではないだろうか。次の例で比較してみよう。

- (102) 明朝体、ゴチック体、教科書体、毛筆体など7種類の書体を内臓する。
(103) ?? 明朝体、ゴチック体、教科書体、毛筆体など4種類の書体を内臓する。
(104) ?? 明朝体、ゴチック体、教科書体、毛筆体と7種類の書体を内臓する。
(105) 明朝体、ゴチック体、教科書体、毛筆体と4種類の書体を内臓する。

これらから、わかることは、提示部で列挙されたことがらの数に関して、述

部でのべる時には、一定の制限があるということである。

すなわち、「など」は、提示部で列挙したことがらの数を超える数が述部に現れていないとおかしいのに対して、「と」の方は、提示部で列挙したことがらの数と一致している必要がある。つまり、

(e) 「など」：提示部の数量的情報量 < 述部の数量的情報量

(f) 「と」：提示部の数量的情報量 = 述部の数量的情報量

である。(注6)

④ 述部におけることがらの複数性・順序性の部分が、「2度にわたって（大腸がん手術を受けた）」「2週続けて（万馬券を取り損い）」「続けざまに（著書が出た）」のように、分析的に取り出せるもので、その部分を省略してしまったのが、次の3.5.の型ではないかと思われる。

3.5. 述部の要素の列挙 (B3)

3.5.1. 用例

このタイプは、複数性・順序性のない述部を持つものである。このタイプの特徴は、提示部で列挙されたことがらが、述部でのべようとする複数の事態を構成する要素になっているという関係が成り立つことである。こちらも、記述の都合上、(ア)(イ)の二つのサブタイプに分けた。例を以下に示す。

(ア) 物事を列挙するもの

- (106) 巨人はその裏、中前打で出した篠塚を川相が送って一死二塁としたが、モスピー、原と倒れ先制機を逃した。（「サンケイスポーツ」92年9月14日）
- (107) 町に、医者は一軒しかない。内科、外科、小児科と一人で引き受けている、金山医師である。（赤川次郎「魔女たちのたそがれ」）
- (108) 全国ツアーハーは、九州・北海道・広島・沖縄・名古屋・大阪と公演。（「SPA！」92年6月3日）
- (109) 「小、中と長島ジュニアの同級生でした。でも阪神が好きなんです」（「サンケイスポーツ」92年9月14日）
- (110) 十五、十六、十七と私の人生暗かった（「あのうたこのうた 2323 曲'92年版」）
- (111) 毎回8組が予選、準決勝、決勝と笑わせたら勝ちの熾烈な戦いを見せてくれるんだけど、勝ち負けを決めるのはゲスト審査員とお客様。（「POPEYE」92年6月26日）
- (112) 同時期に三人以上の日本人ライダーを見ることなど、八〇年代まではなかっ

- たことだ。今年は五〇〇cc, 二五〇cc, 一二五ccとある三クラスにおののおの一人、二人、六人と日本人が走っている。(「週刊朝日」92年7月17日, p132)
- (II3) やがて、ひとつふたつと帆が上がったかと思う間もなく、数え切れないほどの帆がモンスターの風のなかに翻った。(「週刊朝日」92年7月17日, p184)
- (II4) 金利が下がる傾向にあるため、先読み財産として〔金を〕3kg、5kgと買います。(「SPA!」92年6月10日)

(イ) 事態を列挙するもの

- (II5) 新しい人間関係がスタートしたり、周りの人達から頼られたり、と活気ある対人運。(「きょうの料理」92年10月)
- (II6) そのほか球宴明けからさっぱり調子が戻らない岡崎は評論家・掛布雅之氏を捕まえてアドバイスを求めたり、嫁は率先してノッカーを引き受けたりと、いい感じ。(「サンケイスポーツ」92年9月14日)
- (II7) 例えば、トラブルがあっても、相手はソフトウェアですから、ネジが緩んだり、ヒューズが切れたりと目に見えるわけではないので、その原因をつかむために見えない敵と闘わなくてはなりません。(「Metro News」92年4月)
- (II8) [塩漬けらっきょうは]そのまま食べたり、塩出して甘酢漬けやキムチ漬けなどにしたりと楽しめます。(「きょうの料理」92年6月)
- (II9) 骨つきだと、値段的には普通のカルビより少し高いが、ほんと骨の周りにくついた部分は感動もののうまさなのだ。ただし、かぶりつきをしなきゃいけないから、手はべとべと、口は脂ぎる、と、デート時には頼まない方が無難かも。(「POPEYE」92年6月26日)

3.5.2. 解説

① 提示部と述部の関係

(ア)のタイプについては、格助詞を想定することのできる格関係が成り立つものが多い。(I6)の提示部の「モスビー、原」と、述部の「倒れる」との意味的関係は、提示部のそれぞれの要素が述部の主語になっているものであり、内容を表しているとは考えがたい。すなわち、これは、「モスビーが倒れ、原が倒れる」という複数の事態を表していると考えられる。同様に、(I7)の例では、「内科を一人で引き受け、外科を一人で引き受け、小児科を一人で引き受ける」という複数の事態を表しているし、(I8)の例では、「九州で公演し、北海道で公演し、……、大阪で公演する」という複数の事態を表している。提示部で列挙された要素と述部との関係は、格関係だけでなく、(II2)～

(II4)のように、数量副詞と述語との関係になっているものもある。一方、(イ)のタイプは、提示部と述部との関係があまり明確ではないが、おおよそ、「～して……」という、軽い理由の意味がこめられたような関係であると思われる。こちらは、提示部が述部の具体的な内容を表しているともとれ、その点でB2に近い。

つまり、B3のタイプは、述部と何らかの同一の構文的関係にある複数の要素が提示部で列挙されているものである。これを、比喩的に表せば、

$$(g) \ ax + bx + cx + \dots + nx$$

という数式を、

$$(h) \ (a+b+c+\dots+n) \ x$$

というふうに、因数分解したようなものである。この場合、述部が、共通因数 x にあたり、述部と同一の構文的関係にある複数の要素が、() 内にあたる。

② 先に書いたように、このタイプはB2の複数性・順序性にあたる部分が省略された表現と考えられる。これと同様に、省略を想定することは、A2の発話内容、思考内容を提示するタイプにもある。

(12) 会社へ行くとでかけたきり、帰ってこない。

(13) 何が入っているかと開けてみた。

(12)では、「言って（言う）」、(13)では、「思って（思う）」が省略されていると思われるが、B3のタイプの場合は、これという特定の語はないようである。

③ B3がB2からの省略だとすると、B2についてのべた特徴が、B3にも同様にあてはまるはずである。たとえば、列挙されている要素をひとつだけとりだして、述部につなげてみるとおかしな文になること、順序性のある事態の列挙は、並び順に意味があることは、同様にあてはまる。すなわち、

(12) ×内科と一人で引き受けている、金山医師である。

(13) ×十六、十五、十七と私の人生暗かった。

は、不適格な文となる。また、提示部に例示を示す語句がある場合は、不自然ではあるが、許容度はやや上がることも、B2と同じである（次の例を参

照)。

- (124) ?新しい人間関係がスタートしたりと活気ある対人運。

B2 では、述部の複数性との整合性という言い方をしたが、B3 では、省略されたと想定される複数性を持つ述部との整合性がないわけである。

3.6. 言語表現内容提示文とのちがい

3.6.1.とりたての助詞の接続

内容提示の「と」にとりたての助詞がつくのは、A の言語内容提示文に限られるようである。それも A1 がほとんどで、A2 は見られない。

実例の集まつものには、「とさえ、としか、とだけ、とでも、とは、とばかり、とまで、とも、」がある(以下にあげる)。このほか、「とすら、とのみ」も言えそうである。

- (125) 男は、島に来てから三日目の真夜中にはキャロルを誘い出そうとさえしたんだ
そうだ。(中村正軌「嘔吐の海」)

- (126) 彼女は、私にはほとんど魔女とさえ思われた。(源氏鶴太「運がよかった」)

- (127) 「……家へ帰ります。」と、女はすこし間を置いてから、そうとしか言い様がないというふうに、いくらか困ったような口調でいいました。(三浦哲郎「お菊」)

- (128) 帽子にコートにスウェードの靴。身なりは洒落た二人だが、砂埃をかぶった姿は都落ちとしか見えない。(野沢尚「ジェームス山の李蘭」)

- (129) 皆、「どうしたの?」と尋ねてきたが、「うん、ちょっとね」とだけ答えて多くは語らなかった。(さくらももこ「もものかんづめ」)

- (130) 「ああ、そうかい。そいつはどうも御馳走さん。」とだけいって、無線のスイッチを切りました。(三浦哲郎「お菊」)

- (131) ノーランは、その間の無聊を一挙に癪そうとでもするかのように饒舌に、一方的に話し続け、(中村正軌「嘔吐の海」)

- (132) 静かな狂気とでもいったらいいのだろうか。(田中光二「泳ぐ男」)

- (133) 人さまに可愛がられる人間になれ……と、母は私に教えたが、そんな可愛がられかたがあろうとは思っても見なかっただろう。(半村良「秋子の写真」)

- (134) 晴子があの事故で実刑を受けるとは、まず考えられない状況だった。(夏樹静子「鼓笛隊」)

- (135) 「人間は個人差の大きい生物ですから、そうとばかりは言えませんが」(有吉佐和子「複合汚染」)

- (136) しめた、とばかり私は紙問屋をやめ、何か月ぶりかで銀座のバーへ行き、目を

かけてくれた姉さん株の一人に相談を持ちかけた。(半村良「秋子の写真」)

- (137) 一時は「再起不能」とまでいわれたが、血のにじむようなりハビリを続けた結果 1988年(昭63)夏、レビューに出演して奇跡のカムバック。(「日刊スポーツ」92年6月5日)
- (138) 二年前にはこの人以外に女房は持たないとまで惚れた相手だけに幸太郎は有頂天になった。(川口松太郎「はだか修業」)
- (139) 最近ではポスト・エリック・サティとも評されるフランスの奇才、パスカル・コムラードの4枚目のアルバム。(「Bounce」92年6月)
- (140) しかし実のところ私は自分がプロの作家になろうともなれるとも思わず、(半村良「秋子の写真」)

3.6.2. 連体修飾への転換

Aの言語表現内容提示するタイプは、

- (141) 慶謝料を払えと訴えた。→慶謝料を払えという(orとの)訴え
(142) 医大に進学したいと思った。→医大に進学したいという(orとの)思い

のように、述部を適宜名詞化すれば、連用修飾から連体修飾への転換ができる。転換前の提示部と述部との意味的関係は、転換後も保たれている。B1, B2の類も同様に、連体修飾への転換が可能である。ただし、「という」は使えるが、「との」は使えない。

以下に、(16)(84)(89)に対する連体修飾をそれぞれあげる。

- (143) 幅は45cmという(×との)コンパクトサイズ。
(144) 一方、ケンはホテルの部屋まちがいや、シーワールドでびしょぬれになったり、飛行機に乗りそこなったり……という(×との)トラブルの連続。
(145) 「STEAL YOUR LOVE」「コーヒー・ルンバ」という(×との)連続ヒット。

一方、B0, B3もほぼ同じであるが、述部の名詞化が難しいものが多い。B0は、述部を名詞化すると、Aのタイプと一緒にになってしまふものがある(43)(44)。「～へと」の例は、連体修飾への転換ができる。B3は、(ア)は不自然な言い方になり、(イ)は許容されるようである。以下に(45)(108)(115)(それぞれ、B0, B3(ア), B3(イ)))に対する連体修飾をあげる。

- (146) いま日本は国際的な要求もあって経済大国から生活大国へという(?との)方向転換
(147) ?九州・北海道・広島・沖縄・名古屋・大阪という(×との)公演。

- (148) 新しい人間関係がスタートしたり、周りの人達から頼られたり、という（×との）活気ある対人運。

3.6.3. 文体

計量的な調査をしたわけではないが、印象としては、Bの属性内容提示文は、スポーツ新聞、カタログ雑誌、パンフレット、ニュース、スポーツ中継などの、事実を報告するという文体によくあらわれる傾向があり、小説、エッセイなどの文学作品系にはあまり用いられないようである。逆に、文学作品には、言語表現内容提示文（いわゆる引用文）が多く用いられる。

4. 提示部の内容に対する述部の制約

B2のことがらを列挙するタイプの説明で、提示部の列挙の順序に意味の無いものと、あるものとがあることをのべた。これは、述部の意味による、提示部への制約を考えることができる。このような制約は、Aの言語表現内容提示文にも存在する。そして、その中に話法の転換が位置付けられるものと思われる。

従来、いわゆる直接話法から間接話法への転換の際、元の話し手からその発話を引用しようとする現発話者への立場の転換にともなって、表現方法が相対的に違ってくるもの（deictic な語）や、現発話者の立場への変換ができない表現（ある種のモダリティー）があることが指摘されてきた（奥津（1970）、砂川（1989）など）。

これらは、提示部の意味の保存性の問題としてとらえた方が、より包括的な説明ができるだろう。つまり、提示部の表現形式や内容を、文の知的意味を変えない範囲でどの程度変更することができかということ、その変更の程度はどのような要因で決定されるかという問題としてとらえ直すことができよう。

Bのタイプにおける、ことがらの列挙の順序を替える替えないという制約については、3.4.1. すでにのべたので、ここでは、Aのタイプについてどのような制約があるかをみてみる。Aのタイプは、提示部の表現形式そのも

のが問題になるものと、表現内容が問題になるものとに大別される。このふたつは主として述部の意味によって区別される。

4.1. 表現形式を保存するもの

言語表現の形式が重要であることをあらわす述部（波線部）を持つもの。意味的には、名づけ、表記に関するものが多い。

- (149) 日常生活で人々がつかいこなしていることばを「自然言語」というが、（吉田夏彦「デジタル思考とアナログ思考」）
- (150) 最初の石質隕石の一種に炭素質コンドライトと呼ばれるものがあつて、（石川喬司「彗星伝説」）
- (151) 新宿から××街道と名づけられた道を、車なら二十何分か走った所だ。（澤野久雄「小さな林檎の実から」）
- (152) ここで言う人工言語 以下 L* と略記する とはいかなるものか。（坂井秀寿「日本語の文法と論理」）
- (153) “準備ができたらどれかのキーを押してください”と表示されるので、リターンキーを押します。”どれかのキー”と表示されていますが、STOP キーやカナキーではダメです。（ヒット アンド メイク「早わかり VZ エディタ」）
- (154) 彼は「誰も電話に出んわ」とくだらないしゃれを言った。

① これらは、形としての言語表現が重要なのであって、それが文か、語かというちがいはない。(153)(154)のように文の形でもかまわない。また、(149)～(151)のように、表記については制約が少ないものと、(152)(153)のように表記方法にまで制約がおよぶものとがある。

② この型は、外延的に同じものであっても、代入可能性はない。たとえば、指示対象を同じくする定名詞句でも、語句を交換することができない。

- (155) 彼は「社長！」と呼び掛けた。
- (156) 彼は「山田さん」と呼び掛けた。

上の例では、呼びかけたということ（命題）は、「彼は社長に呼びかけた」でも「彼は山田さんに呼びかけた」でも同じ内容を表せるが、「呼びかける」の内容として表現自体を問題にするわけであるから、(155)と(156)は別の事態を表すことになる。

③ また、述部ではなく、提示部内に表現形式そのものに着目する要素がある場合もある。このような場合も、その着目された語句の変更はできない。

- (157) A は、「あとちょうど 100 ヤードある」と言った。
(158) A は、「あときっかり 100 ヤードある」と言った。
(159) A は、「あとちょうど 91.44 メートルある」と言った。

上の場合は、「ちょうど」が 100 という数の特徴に言及しているので、(158)は命題内容が保存されているが、(159)は「ちょうど」との意味的整合性がくずれてしまっている。

4.2. 命題内容を保存するもの

提示部で述べられている命題内容が重要であることを示す述部の場合は、命題内容を変えない範囲で語句の変更をしても、文全体の意味は変わらない。いわゆる直接話法から間接話法への転換は、こちらに属する。

4.1. と 4.2. の区別は、述部によって決まるものもあるが、文脈で決定される場合も多い。例えば、

- (160) 黒板にバカと書いてある。
(161) この本には原発は危険だと書いてある。

(160) は、表現形式を重視する方の「書いてある」で、(161) は、命題内容を重視する方の「書いてある」である。だから、

- (162) 黒板にバカモノと書いてある。
(163) この本には原子力発電所はあぶないと書いてある。

(160) と (162) は別の意味になり、(161) と (163) は同じ意味になる。

また、次の例のように、ひとつの述部が、同時に表現形式保存型の提示部と命題内容保存型の提示部をとっている例もある。(太線は表現形式保存型の提示部を示す)

- (164) NIFTY-Serve が混雑している時には、「.00+」を送信した時 「00+」 とセンターと接続する事が出来ないと応答が返って来ます。〔まいと～く V2.1 通信ガイド 2 [実習編]〕

5. まとめ

本稿では、引用の助詞とされる「と」の用法のバラエティーをみると、によって、狭義の引用をその中に含む内容提示というカテゴリーを設定し、包

括的な「と」の用法を整理を試みた（注7）。本稿の分類の観点と比較的近いものに、国立国語研究所（191）がある。そこでは、「と」を「動作・作用・状態の内容を示す」としている。が、本稿であげた、Bのタイプについては、かなりの違いがみられる。B0については、相手をあらわす「と」の方に分類している。また、B1～3については、B2(イ)のタイプが「動作・作用のしかた・行われ方を示す」とされているだけで、他は例示がない。

言語表現内容提示文と属性内容提示文とは、本稿でみたように、連続性・類似性があるが、提示部に対する疑問表現や、述部のムードなど異なる点もある。そのような違いについては、ここではふれられなかった。また、述部の提示部に対する意味的制約については、どのようなものがあるのか、具体的に明らかにする必要があるだろう。また、連体修飾的な内容提示と連用修飾的な内容提示の関係や、話しことばでよくつかわれる「って」のとの比較の用法のひろがりなどについても、今後の考察の課題としたい。

(注)

1. 藤田（1988）では、
谷川名人は5八角と打って粘る。〔原文の傍線省略〕
という例を紹介して、このような例を「引用」の一種というなら、「別の体系を考える必要があるだろう」と述べている。しかし、本稿の立場からいえば、この例も狭義の引用の側に属することになる（表1およびその解説を参照）。
2. 本稿では、引用部が「と」で示されていて、それを連用修飾的に受ける述部を持つ文を対象とした。したがって、引用部が「って」で示されているもの、あるいは、引用部を「という」などで示し、それを連体修飾的に受ける名詞句を持つ文（あるいは名詞句）は対象としなかった。前者については、「って」は、引用という観点に限れば、取り立ての助詞の付き方に「と」と違いがあるが、文体的意味の違いがほとんどだと思われるので特に言及はしていない。後者については、稿を改めて別の形でまとめたいと思っている。
3. 用例文の後に、（ ）に入れて出典をあげた。出典のないものは、作例である。
用例中の〔 〕の部分は本稿での注釈であり、原文にはない。
4. 対象言語とメタ言語の区別は、言語表現の「使用（use）」と「言及（mention）」の区別と混同されやすいが、両者は別のことがらである。現在では、「一般に言語表現が言語外のなにかについて語っている場合、それは使用されているのであり、

言語表現自体について語っておれば、それは言及されていると言われる。」(森(1984), p.18), あるいは, "In A (= 'London' is a word six letters long.) the word 'London' is said to be mentioned; in B (=London is a city.) the word 'London' is said to be used (and not mentioned)." (Hunter (1971), p.10) に見られるように、言語（語あるいは文）の用法の種類としてとらえられており、語や文を使用か言及かに振り分けることができるかのような印象を与える。

しかし、Quine (1940) によると、語や文には使用と言及の両方の面があるのであって、どちらかだけということはないことが分かる。例えば、"Boston is populous", という文において、「地名が使用され、都市が言及されている」(ibid., p.23) としていたり、「われわれが、ある x について言及するときは、その x の名前を使用する」(ibid.) と述べていることからも明らかである。ここでは、「言及(mention)」は、「指示(refer)」のような意味合いで使われている。

(この区別は、言語階層説と呼ばれ、言語哲学において、いわゆる「嘘つきのパラドックス」の解決策として導入されたものである。詳しくは、Tarski (1944) 参照。)

5. 「などと」あるいは、連体の「などの」も類義表現としてあげられるが、ここで「と」との比較という点からみると結果的に「など」の場合と同じである。
6. 提示部の数量的情報量というのは、列挙されたことがらの数だけでは決まらない場合がある。次の例のように、前文脈を含んで考えないと、述部との数量的情報量が一致しない例もある。

(16) 後半開始直後の 2 分、伊勢丹のカウンターを攻撃を止め、切り返して日向野が中央トライ。好ディフェンスで対抗していた伊勢丹があっさり抜かれた。その後、ナモア(4分)内藤(6分)飯島(11分)ナモア(20分)とたてつづけの 5 連続トライで、前半の 6-0 のスコアが、あっという間に 39-0 まで広がった。
〔サンケイスポーツ〕92年9月14日)

また、明示的な数量が述部にない場合は、提示部で挙げることがらが一つの場合もある。

7. 本稿での分類ではとりあげなかったものには、次のようなものがある。
 - 否定と呼応するもの

(16) このコースは、風が同じ方向から吹くホールが 3 つと続くことのない難コースです。(「週刊朝日」92年7月17日)
 - 慣用句的なもの

(16) ママは腰に手をあてて、店内せましと堂々と立ち、(栗本薰「イエロー・マジック・カーニバル」)

(16) ママが怒りはじめたときに、雲をカスミと逃げていっちゃったよ。(栗本薰「イエロー・マジック・カーニバル」)

○「～のように」という意味になるもの

(I6) 山と積まれた書類

(I7) 花と散る。

(I8) 宇宙の塵と消える。

参照文献

Clark, H. H. (1990) "Quotatios as demonstrations", LANGUAGE 66-4

Garver, N. (1965) "Varieties of Use and Mention", Philosophy and Phenomenological Research, XXVI

Hunter, G. (1971) Metalogic, University of California Press.

Quine, W. V. (1940) Mathematical logic, H.U.P., Cambridge, Mass.

Tarski, A (1944) "The semantic conception of truth and the foundations of semantics", Philosophical and Phenomenological Research 4 (邦訳「真理の意味論的観点と意味論の基礎」, 坂本百大(編) (1987)『現代哲学基本論文集Ⅱ』劉草書房)

奥津敬一郎 (1970) 引用構造と間接化転形, 「言語研究」56

北上光志 (1992) 日本語「と」付き引用文の情報構造, 日本言語学会第104回大会発表要旨

国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞』

砂川有里子 (1987) 引用文の構造と機能 — 引用文の3つの類型について —, 「文藝言語研究 (言語編)」13

砂川有里子 (1988a) 引用文の構造と機能 (その2) — 引用句と名詞をめぐって —, 「文藝言語研究 (言語編)」14

砂川有里子 (1988b) 引用文における場の二重性について, 「日本語学」7-9

砂川有里子 (1989) 引用と話法, 北原保雄(編) (1989)『講座日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体(上)』明治書院

藤田保幸 (1986) 文中引用句「～ト」による「引用」を整理する, 宮地裕(編) (1986)『論集日本語研究(一) 現代編』明治書院

藤田保幸 (1988) 「引用」論の視界, 「日本語学」7-9

宮本千鶴子 (1989) 何が引用表現でないか, 「東京女子大学日本文学」72

森俊洋 (1984) 『論理学・序説』九州大学出版会